

88 投稿

# 社会性を育む統合保育の推進要因に関する研究

—フォーカス・グループインタビューを用いて—

マツモト ミ サ コ シノハラ リョウジ スギサワ ユウカ タナカ エミコ  
 松本 美佐子\*1 篠原 亮次\*4 杉澤 悠圭\*2\*5 田中 笑子\*1\*6  
 トミサキ エツコ ワタナベ タ エ コ モチヅキ ユ キ コ トクタケ ケンタロウ  
 冨崎 悦子\*1\*7 渡辺 多恵子\*1 望月 由妃子\*1 徳竹 健太郎\*1  
 スギタ チヒロ ミヤザキ カツノブ エダモト シンイチロウ アンメ トキエ  
 杉田 千尋\*1 宮崎 勝宣\*8 枝本 信一郎\*8 安梅 勅江\*3

**目的** 40年にわたり統合保育を実施している保育専門職に対しグループインタビューを行い、質の高い統合保育とインクルーシブ教育の推進要因を明らかにすることを目的とした。

**方法** 障害児を積極的に受け入れている認可保育園の専門職に対してフォーカス・グループインタビューを実施した。対象は8名（男性4名，女性4名），社会福祉法人理事長，保育園の園長，主任クラスの保育専門職者，障害者の共同生活介護事業管理者であった。内容は，統合保育の原点と展開についてであった。グループインタビューから得られた結果をカテゴリー化し，質の高い統合保育を展開するための要因を抽出し分析した。

**結果** 質の高い統合保育の推進要因を「個の領域」「相互の領域」「地域システムの領域」の3領域に分類した。具体的な要因としては「共感性の獲得」「表現力の獲得」「自己効力感の獲得」「仲間同士のかかわり」「保育士のかかわり」「地域社会とのかかわり」「社会ニーズへの先見性」の6点であった。

**結論** 質の高い統合保育とは，仲間同士や保育士とのかかわりを通し子どもの社会性の育みを促進する保育である。インクルーシブ教育の推進には社会ニーズへの先見性，養育者にとどまらず地域住民を巻き込み地域の活性化に貢献するコミュニティ・エンパワメントの必要性が示唆された。

**キーワード** コミュニティ・エンパワメント，フォーカス・グループインタビュー，保育専門職，子育て支援，統合保育

## I 緒 言

学童期，思春期における「キレル」「パニックになる」など衝動行動や不登校，引きこもりなど社会不適応等の増加に伴い，少子化時代の子どもの社会性の育ちへの関心が高まっている。また，「落ち着きがない」「過敏である」「こだわりが強い」「対人関係がぎこちない」など，いわゆる気になる子どもの増加が指摘されている。子育て支援機関では，障害の診断はないが気になる行動を示す子どもやその養育者に対し，

どのように接してよいかわからず不安を抱いている保育士が多い<sup>1)~3)</sup>。その一方で，幼稚園や保育所入園後に障害の診断がついた場合，8割の園が保育を継続しており<sup>4)</sup>，支援技術の取得は喫緊の課題である。

障害のある者もない者も一緒に学ぶ学校教育を通じて，障害者に対する社会的差別の解消を目指す<sup>5)</sup>インクルーシブ教育は，国際的潮流である。インクルーシブ教育は，すべての子どもが地域社会で共に学び，生活することを目標としている。日本においては，2007年に特殊教育

\*1 筑波大学大学院人間総合科学研究科院生 \*2 同医学医療系研究員 \*3 同教授

\*4 山梨大学医学工学総合研究部講師 \*5 牛久市健康管理課 \*6 日本学術振興会特別研究員

\*7 上智大学総合人間科学部看護学科助教 \*8 社会福祉法人路交館

から特別支援教育に移行した。知的能力の高い発達障害児を支援対象とするとともに、障害児が教育を受ける場がさらに拡大した<sup>6)</sup>。特別支援教育の潮流は就学児童にとどまらず、就学前の子どもの教育や保育に波及しており、特別な支援を必要とする子どもへの質の高い保育がこれまで以上に求められている。

障害児の保育形態<sup>7)</sup>には、障害児のみの分離保育、障害児通園施設と保育園や幼稚園とが一時的に交流する交流保育、障害を持たない幼児集団と障害児と一緒に保育する統合保育がある。保育士への質問紙調査から障害のない子どもへの思いやりの心や社会能力の発達にプラスに働く<sup>8)</sup>、保育士自身の成長、感動がある<sup>9)</sup>などの効果が報告されている。一方、統合保育を実施していれば、障害理解が自然に進むという考えは間違いである、とした報告がある。特に、見た目障害がわからない発達障害児の障害理解を促進するためには、定型発達児やその養育者へのかかわり方が重要<sup>10)11)</sup>と課題が指摘されている。障害の種別、重症度、受け入れる障害児の割合、保育の質は一様ではなく、質の高い統合保育の実現に向け確立された方法論は見当たらない。

保育園を対象とした大規模コホート調査では、質の高い保育と養育者支援により、家庭における子どもへの適切なかかわりや養育者の育児への自信につながり、子どもの経年的な発達や健康状態を良好にするとともに問題行動の減少を明らかにしている<sup>12)15)</sup>。

そこで本研究は、本来のインクルーシブ教育の理念に基づく統合保育に40年の実績を持つ施設における保育専門職に対して、フォーカス・グループインタビューを実施した。質の高い統合保育を実現し、インクルーシブ教育を推進させるために必要な要因を明らかにすることを目的とした。

## Ⅱ 方 法

### (1) 対象者

対象は、障害児を積極的に受け入れ統合保育

を40年間継続している認可保育園の保育専門職等8名(男性4名、女性4名)である。社会福祉法人の理事長、系列保育園の園長、主任保育士、障害者の共同生活介護事業管理者など、統合保育に精通している管理者に抽出を依頼した。

### (2) 調査方法

調査場所は静かな個室とし、参加者の承諾を得てICレコーダーとビデオを設置し記録した。情報を抜け漏れなく整理するため、観察者は目立たない場所でグループインタビューの様子を観察し記録した。所要時間は1時間30分とし、参加者の話しやすい雰囲気づくりのためお茶を用意するなどの工夫をした。調査内容は、統合保育に携わる契機、統合保育の実際とその良さ、困難点、質の高い統合保育の展開についてであった。

### (3) 分析方法

ICレコーダーに録音された記録から正確な逐語録を作成した。観察記録による参加者の反応を加味し、複数の分析者で確認しながらテーマに照合して重要な言葉(重要アイテム)を抽出した。抽出した重要アイテムについて、個人、相互、地域の関係が明確なシステム構造分析を用い、類型化(重要カテゴリーの抽出)した。重要アイテムの類型化、抽出したサブカテゴリー、重要カテゴリーについては、グループインタビューに精通した専門家のスーパーバイズを受けた。

### (4) 倫理的配慮

対象者には事前に、研究目的、方法、名前が外部に出ないこと、インタビューに参加したことではいかなる不利益も受けないことを説明し、インタビュー参加への同意を得た。ICレコーダーおよびビデオカメラによる記録は、理由を説明し承諾を得た上で実施し、鍵つきのケースに保管した。なお本研究は、筑波大学倫理審査委員会の承認(課題番号455号大規模コホート調査に基づく気になる子どもへの早期支援プログラムの開発研究)を得て実施している。

### Ⅲ 結 果

教育を推進させる要因として、語られた内容を「個の領域」「相互の領域」「地域システムの領域」の3領域に分類した(表1)。

質の高い統合保育を実現し、インクルーシブ

表1 質の高い統合保育の実現とインクルーシブ教育推進の要因分析

	重要カテゴリー	逐語データ概要
個の領域	共感性の獲得 感情の共有  承認 尊重	A君、このまま給食たべなくていいかな〜と投げかけることで、子どもたちが自分で考えて手伝うようになる。 障害のある子どもがいると周囲が成長できる。 居場所がある。みんなの温かいまなざしが支えてくれる。 一生懸命やっているのが伝わると、負けてもその子のせいにしない。 かえって触発される。あの子が頑張っているから自分も頑張る。
	表現力の獲得 自己主張の重要性  苦手意識の克服	A君(障害児)自身も「あ〜とかう〜とか」自己主張するべき。 異年齢の縦割り保育や障害児には今まで簡単に伝わったことが伝わらず、トラブルが頻発する。 説明方法を工夫するようになる。 言えるようになるまでやらされるとできるようになる。
	自己効力感の獲得 豊富な経験  問題解決能力の向上	電車に乗って友達(子どもだけで)と遊びに行けたことを誇りに思った。 そんな経験を子どもたちにさせたい。 どうあるべきか、一緒に相談しつつ、みんなで力をつけていく。 悩む力が生きる力。判断力、応用力が身に付く。 半分はバギーに乗る。〇〇ちゃんは手をつなぐ、など子ども同士で悩んで話し合って決めていく。
相互の領域	仲間同士のかかわり 互いに承認し尊重  触発し合い共に成長	ADHDの子どもが子どもたちに受け止められたら行動が落ち着いた。 見て過ごしていくことの重要性。知ってもらおうと対応が変わる。 居場所がある。みんなの温かいまなざしが支えてくれる。 障害児同士でたつき合っ、その後たたかなくなるなど学習する。 異年齢の縦割り保育や障害児には今まで簡単に伝わったことが伝わらず、トラブルが頻発する。 でも説明方法を工夫するようになる。 一生懸命やっているのが伝わると、負けてもその子のせいにしない。 かえって触発される。あの子が頑張っているから自分も頑張る。
	保育士のかかわり 個性の尊重  自立促進  自己効力感の育み  養育者支援  保育士の成長	積極的に助ける子ども、遠巻きにみているだけの子ども、通りすがりにあいさつ代わりに頭を軽くたたく子ども、さまざまな関わり方がある。 あってOK。型にはめない。職員があなたがあなたのままでもいいと思えることが大事。 障害児ができることも手伝ってしまっていることに気づく。 自分でできることは自分でやらせる。 運動会のリレー歩けない子はどうするか、半分は這って、半分はバギーに乗る。 〇〇ちゃんは手をつなぐなど子ども同士で悩んで話し合って決めていく。 どうあるべきか、一緒に相談しつつ、みんなで力をつけていく。 障害児の子をやめさせてくれという声も多かった。障害児の子をやめさせてくださいと言われたら、あなたがやめてください。と対応していた。 入学式に障害児がいるとはっきり言う。4月に親子で懇談会をする。障害児の親が話すと、真剣さが伝わって食べるのをやめて話を聞くようになる。 担任を変えてくれ、またはこの担任は1年でいい。という話は今もある。 先生が頑張って子どもと仲良くなってくると、1年でと言わなくなる。 重度の子がいないと保育の核が持てない、求心力になる。子どもたちの頑張っている姿に感動する。
地域システムの領域	地域社会とのかかわり 統合保育への理解拡大  地域住民との連携	障害者がいない社会はうその社会。子どもたちに歪んだ社会を教えるはいけない。 最初は偏見があっても、知ってもらおうと対応が変わる。 地域に住んでいる人の発言権は大きい。 祭りなど衰退していた地域のバックアップをしている。アルミ缶回収など地域の役に立ってまずとアピールしている。
	社会ニーズへの先見性 夜間保育園体制の充実  子育て支援対策	21時22時に近所の商店街を通るとそこで遊んでいる子どもにも出会う。その子どもたちへ支援が届いていなかった。 夜間働いていて、地域に入れない、行事に参加できない親の問題が浮上してきている。 障害児だけではなく、夜間一人で過ごしなくてはいけない子ども、親は側にも育て方がわからないなど、保育に欠ける子ども達への支援が必要。 子育て支援、子育て相談、親子教室、小型児童館、夏はキャンプ。登山。行き場のない子を対象に企画運営している。

### (1) 個の領域

個の領域では、保育専門職が子どもの発達にとって重視している内容を抽出した。

#### 1) 共感性の獲得

立場の異なる他者の感情を共有し、相手の立場や努力を承認し尊重することで、自己を啓発する行動につなげる。

#### 2) 表現力の獲得

自分がどのように感じているのか、どうしてほしいのか、察してもらうことを期待して受け身の姿勢ではなく、しっかり自己主張ができる。

#### 3) 自己効力感の獲得

多様で豊富な経験を通して、「できる」ことの喜びを知る。困難な課題に直面した時に悩み、話し合っ解決していくことで、判断力や応用力を養う。

### (2) 相互の領域

相互の領域では、個々の力を最大限に引き出すような仲間、保育士のかかわりについて抽出した。

#### 1) 仲間同士のかかわり

個の力を引き出す仲間同士のかかわりとして、互いに承認し尊重することで、居場所を獲得し安心できる。それが、新たな事柄への挑戦につながり、お互いに触発し合い成長できる。

#### 2) 保育士のかかわり

子どもに対して、個性を尊重し、過保護、過干渉を避け、子どもを信じ見守ることで自立を促進する。困難な課題の達成を支援し、自己効力感を育む。養育者に対して、障害児の養育者への支援だけでなく、定型発達児の養育者に対して障害児の養育者への共感を促進し、相互扶助の関係性の構築を手助けすることで障害理解が促進する。さらには子どもや養育者、保育士同士触発し合い、保育士自身の成長につながる。

### (3) 地域システムの領域

地域システムの領域では、インクルーシブ教育推進につながる社会活動について抽出した。

#### 1) 地域社会とのかかわり

インクルーシブ教育推進のためには通園して

いる養育者にとどまらず、地域活動に積極的に参加することで地域を活性化し、地域住民との連携を強め、理解の拡大に努める。

#### 2) 社会ニーズへの先見性

夜間保育体制の拡充や育児に困難感を感じている養育者への支援、学童保育など、障害児だけでなく、自己の力だけでは困難な状況にある人に対する支援を先駆的に実施する。

## Ⅳ 考 察

### (1) 参加者の性質とデータの信頼性、妥当性

本研究では、既存のプログラムを評価し、新しいプログラムやサービスなどの基本的な課題を明らかにする手法として、広く取り入れられているグループインタビュー法を用いた。フォーカス・グループインタビュー法は1対1の面接よりプレッシャーが少なく、対象者のなまの声をそのまま情報に活かすことができ、相互刺激によるグループダイナミクスを活用することで、面接や質問紙など個別に得られた情報より、短時間で多くの情報を整理することができる<sup>16)17)</sup>。

この手法の信頼性、妥当性を高めるためには、対象メンバーの選定法、インタビュー項目の設定法、妥当性のかく乱要因の除去、インタビューアのトレーニング、記録の工夫が必要であるとされている<sup>18)</sup>。そこで、以下の4点を厳密に実施し、データの信頼性を高めるよう配慮した。

①対象者の設定は、統合保育に精通している社会福祉法人の管理者に依頼し、統合保育の実際と今後の展開についてお話いただける方を選別した。②インタビュー項目は、対象者が実際に実施し、感じていることを表現しやすいような具体的な内容とし、半構成的に設定することで、参加者が自由に意見を述べ、討論することが容易のように配慮した。③グループインタビュー進行に関しては、経験を積んだインタビューアが実施した。インタビューアはできる限り参加者の自由な発言を促し、効果的なグループダイナミクスの促進に配慮した。④分析は、逐語記録と観察記録から重要アイテム、重要カテゴ

リーの妥当性につき、複数の専門職間で議論を重ねて抽出した。また、グループインタビューに精通した専門家のスーパーバイズを受けた。

## (2) 質の高い統合保育の推進要因

### 1) 個の要因

本研究において、個の要因には、「共感性の獲得」「表現力の獲得」「自己効力感の獲得」の3点が重要カテゴリーとして抽出された。社会性は共感、自己抑制、自己表現の3側面からとらえられることが多い<sup>19)~21)</sup>。共感とは相手の情動の状態あるいは条件から生じ、その状態や条件に伴いこちら側に起きる代理的な感情のあり方である<sup>22)</sup>。共感には友情や類似性があり、自分と似ている人、仲良くなった人、近くにいる人に、より共感を示す<sup>23)</sup>。統合保育において健常児と障害児が共に過ごすことで、似ている点を見いだし相手を知ることで親近感が出現し、共感を抱く可能性がある。また、同年代の仲間同士では簡単に理解が得られる内容でも、障害の種別によっては困難なこともあり、相手の理解を得られる表現方法について試行錯誤する機会が増える。さらに、種々の経験を通じ悩み協議し合うことで、判断力や応用力など問題解決能力を向上させる可能性がある。統合保育には、子どもの社会性が育まれる機会が多いことが示唆された。

### 2) 相互の要因

相互の要因には、「仲間同士のかかわり」「保育士のかかわり」が重要カテゴリーとして抽出された。幼児期、児童期においては、仲間がいることで交流や遊びの楽しさを味わい、相互に支えあい情緒的な安定が得られる<sup>24)</sup>。お互いを承認し、触発し合い共に成長するためには、周囲の大人のかかわり方が重要である。人は役割や責任の付与により、思いやり行動が出やすい傾向がある。困難な課題を遂行し自己効力感を得ること、人に親切にする行為をおとなが手本となり示すことで、思いやりの心が育まれる<sup>25)26)</sup>。本研究より過干渉を避け子どもの力を信じて見守ること、少し困難な状況を設定し自分たちの力で問題を解決するよう保育士が導く

ことで子どもの社会性や思いやりの心を育むことが示された。

一方、母親のストレス軽減は子どもの発達に良い影響を与え、養育者の育児に対する自信を高める支援は重要である<sup>14)15)</sup>。障害児の養育者への支援的かかわり、定型発達児の養育者への理解を求めるかかわりが、養育者同士を結び付け、子育て子育て環境の改善につながるということが示唆された。

### 3) 地域システムの要因

地域システムの要因として、「地域社会とのかかわり」「社会ニーズへの先見性」が重要カテゴリーとして抽出された。これまで障害を持つ人は、障害ゆえに地域社会から隔離された障害者施設で生活する 경우가少なからずみられた。昨今はより質の高い生活の実現に向けて、施設から地域への動きが活発化してきている。

しかし、地域社会が障害児(者)に対して、理解の乏しいまま生活の拠点を地域に置いたとしても、それだけで質の高い生活は実現しない。障害を持った人が地域社会でよりよい生活を送るためには、乳幼児期から障害児やその家族を支援できる地域社会の体制が必要である<sup>27)</sup>。統合保育にはさまざまな形態がある<sup>7)</sup>。統合保育の実践には障害の有無を問わず、すべての子どもが地域社会で共に学び、生活すべきである<sup>5)</sup>。インクルーシブ教育の理念に基づく保育園の整備、子育て子育て支援対策など幅広い社会ニーズへの先見的な取り組みの重要性が示唆された。

さらに地域活動を通じ住民と連携しながら、取り組みに対する理解を深めることで、地域全体のエンパワメントにつながり、インクルーシブ教育の推進につながる可能性が示唆された。

## (3) 本研究の限界と可能性

本研究は、統合保育を40年間継続している一社会法人における単一の調査結果である点が限界といえる。質的研究であることから、統計学的理論に基づいて評価することは困難である。量的研究と比較すると対象の偏りの度合いについて数値的に明らかにすることは難しく、その点が本研究の限界といえる。今後、他施設にお

いても同様の調査を行い、比較検討することが必要である。また質的研究の妥当性と信頼性を保つためにアンケートの実施や第三者による客観的な観察調査によるデータの評価など量的研究を組み合わせた比較を行い、さらに検討していく必要がある。

## V 結 論

質の高い統合保育とは、仲間同士や保育士とのかかわりを通し、子どもの社会性の育みを促進する保育である。

インクルーシブ教育の推進には、社会ニーズへの先見性、養育者にとどまらず地域住民を巻き込み地域の活性化に貢献するコミュニティ・エンパワメントの必要性、が示唆された。

### 謝辞

本研究をまとめるにあたり、ご協力いただきました多くの方々にお礼を申し上げます。

なお、本研究は文部科学省科学研究費(23330174)の助成を受けて実施しました。

### 文 献

- 1) 本郷一夫, 澤江幸則, 鈴木智子, 他. 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査, 発達障害研究 2003; 25(1): 50-61.
- 2) 平澤紀子, 藤原義弘, 山根正夫. 保育所・園における「気になる・困っている行動」を示す子どもに関する調査研究-障害群からみた該当児の実態と保育者の対応および受けている支援から-, 発達障害研究 2005; 26(4): 256-67.
- 3) 久保山茂樹, 齊藤由美子, 西牧謙吾, 他. 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査-幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言-, 国立特別支援教育総合研究所 研究紀要 2009; 36: 55-76.
- 4) 石井正子. 幼稚園・保育所の園長等管理職の統合保育に関する認識-インクルーシブな保育に向けての現状と課題-, 学苑・初等教育学科紀要 2009; 824: 62-78.
- 5) 中村満紀男, 前川久男, 四日市章. 理解と支援の特別支援教育<2訂版>. 東京: コレール社 2009; 10.
- 6) 学校教育法一部改正2007年 (<http://hourei.hounavi.jp/hourei/S22/S22HO026.php>)2012.3.28.
- 7) 園山繁樹. 障害幼児の統合保育をめぐる課題-状況要因の分析-, 特殊教育研究 1994; 32(3): 57-68.
- 8) 日浦直美. 統合保育に関する研究-統合保育に関する研究-健常児集団の社会性の発達からみた統合保育の意義(1), 聖和大学論集 1984; 12: 225-47.
- 9) 河内しのぶ, 福澤雪子, 濱田裕子. 統合保育が保育士に与える影響-K市で統合保育を経験した保育士へのアンケート調査より-, 産業医科大学雑誌 2006; 28(3): 337-48.
- 10) 北野絵美. 汎汎性発達障害を早期に疑われる幼児への発達支援 第2報-療育機関等から保育園・幼稚園等への移行を通して見えてくる「意義」と「課題」について-, 治療教育学研究 2010; 30: 29-39.
- 11) 徳田克己. 幼稚園・保育所における障害理解指導, 徳田克己, 水野智美編. 障害理解: 心のバリアフリーの理論と実践, 東京: 誠信書房, 2005: 219-23.
- 12) 丸山昭子, 鈴木英子, 安梅勅江. 長時間保育の子どもの発達への影響に関する研究-育児環境との関連を中心に-, 日本保健福祉学会誌 2002; 9(1): 53-62.
- 13) 安梅勅江, 呉栽喜. 夜間保育の子どもへの影響に関する研究, 日本保健福祉学会誌 2000; 7(1): 7-18.
- 14) 黄川田美玲, 安梅勅江, 丸山昭子, 他. 保育園を利用する4歳児の発達への複合的な関連要因に関する研究-母親のストレスに焦点をあてて-, 日本保健福祉学会誌 2006; 12(2): 15-24.
- 15) 丸山昭子, 大関武彦, 安梅勅江. 保育園を利用する2歳児の発達・社会適応・問題行動・健康状態への複合的な関連要因-母親のストレスに焦点をあてて-, 厚生」の指標 2006; 53(6): 24-33.
- 16) 安梅勅江. グループインタビュー法 科学的根拠に基づく質的研究法の展開, 東京: 医歯薬出版(株), 2001: 1-40.
- 17) 安梅勅江. グループインタビュー法Ⅱ/活用事例編 科学的根拠に基づく質的研究法の展開, 東京: 医歯薬出版(株), 2003: 16-9.
- 18) 瀬畑克之, 杉澤廉晴, マイクD.フェッターズ, 他. 質的研究における方法論の妥当性に関する検討-フォローアップアンケートの結果から-, プライマリ・ケア学会誌 2001; 24(4): 277-83.
- 19) Gresham FM, Elliot SN. Social skills rating system-Secondary. Circle Pines, MN: American Guidance Service 1990: 1-223.
- 20) 安梅勅江, 矢藤優子, 篠原亮次, 他. 子どもの社会能力評価「かかわり指標」の妥当性と信頼性 日本保健福祉学会誌 2007; 14(1): 23-32.
- 21) 高橋雄介, 岡田謙介, 星野崇宏, 他. 就学前児の社会的スキル-コホート研究による因子構造の安定性と予測妥当性の検討-, 教育心理学研究 2008; 56: 81-92.
- 22) Naナンシー・アイゼンバーク, ポール・マッセン 思いやり行動の発達心理 菊池章夫, 二宮克美訳, 東京: 金子書房, 1991: 174.
- 23) ホフマン, M.L. 菊池章夫, 二宮克美, 訳. 共感と道徳性の発達心理学, 東京: 川島書店, 2001: 228-32.
- 24) 堀野緑, 濱口佳和, 宮下一博. 子どものパーソナリティと社会性の発達. 京都: 北大路書房 2000: 11-4.
- 25) 菊池章夫. 思いやりを科学する. 東京: 川島書店, 1988: 93-9.
- 26) 柏木恵子. 子どもの「自己」の発達, 東京: 東京大学出版会 第2刷, 1985: 250-5.
- 27) 安梅勅江編. コミュニティ・エンパワメントの技法-当事者主体の新しいシステムづくり-, 東京: 医歯薬出版(株), 2005: 100-1.